

その治療法は
本当に
効くのか

行つて、見て、聞いた

連載第二十回

伊藤隼也

今回のテーマ

ピロリ菌の除菌

胃内治療は、ピロリ菌による胃・十二指腸潰瘍の治療に必須と、除菌しない限り胃の中にはみられ、慢性的胃炎の原因となる。され、胃潰瘍になることさえある。

早期胃がんの内視鏡手術後の、新たな胃がんの予防にも寄与する

研究への執念が生み出した快挙といえるだろう。今回は、50歳以上の日本人の7割が感染しているといわれるピロリ菌の除菌治療の最前線を追つた。

胃の中にみついたピロリ菌がどのように慢性胃炎や胃潰瘍を引き起こすのか、今でも完全にはわからっていない。だが一度感染する

患者は、小さな袋に息を吹き込み、検査薬（尿素）を飲んでからまた別の袋に息を吹き込む。検査用の機器に呼気の入った2つの袋をセットすれば、ピロリ菌感染の有無が判定可能。検査は20分程度で、苦痛もまつたくない。精度も高いため、数ある検査の中でもこの方法が主流になっているという。

「ストレスで胃が痛い」と悩む読者は多いだろうが、ストレスのほかにも胃の病気に大きな原因があるのを存じだろうか。

'95年のノーベル医学生理学賞は、オーストラリア人研究者、ウオーレンとマーシャルに贈られた。彼らはヘリコバクター・ピロリ菌（以下、ピロリ菌）を発見し、ピロリ菌への感染が慢性胃炎や胃潰瘍、十二指腸潰瘍の引き金になることを突き止めたのだ。

細菌と胃の病気の関係にまつわる報告は過去にもいくつかあったが、「54年に消化器病学の大業であるバルマー」によって完全に否定された。しかし二人は既成概念にとらわれることなく研究を続け、胃から発見したピロリ菌の培養に成功したのだ。

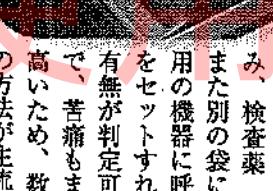
まさに本誌読者の多くは、ピロリ菌感染の「要注意世代」なのでなかろうか。それにしても、口から菌が入るとすれば、キスでもうつってしまうのだろうか？

「一般的に性感染はありません」とされています。リスクが高いといわれているのは、親子間感染です。免疫力の弱い幼い子に口移しで食べ物を与えるといった行為はしないほうがいいですね」（佐藤医師）

佐藤医師がピロリ菌の研究や検証を始めたのは、「86年頃のこと。世界有数の「胃がん大国」である日本の大学や学会は、胃の研究では世界一」という自負があり、前述した二人のオーストラリア人の報告を長いこと認めなかつた。佐藤医師は、技師と共に困難なピロリ菌の培養に取り組んだ。

「胃の中の環境を再現しなければ培養はできません。幸い培養に成功し、顕微鏡を使って自分の目で

(左)検査は医師の指示のもと、(下)呼気を袋に吹き込むだけ(右)検査薬を飲む前と後の呼気を比較して判定を行う



と、除菌しない限り胃の中にはみられない。このため、衛生環境の整備され、中年以降の世代に多く、60歳以上では約8割と、発達途上国並みの感染率だ。その理由を、同病院の佐藤貴一医師はこう話す。

「人の嘔吐物や糞便についたピロリ菌は、食べ物や飲み物を介して再び口に入るといわれています。年齢でいうと4歳くらいまでの、免疫力の弱い時期に感染しやすい。このため、衛生環境の整備されていない時代に育つた世代は、幼い頃に感染することが多かつたのです。一方で、最近の若者は胃の痛みを訴えることが少なくなりました。むしろ、潰瘍性大腸炎などの腸の病気のほうが多いのではないかでしょうか」

顔を見てくれる患者さんが多くなりましたね」（佐藤医師）

ピロリ菌との関連が疑われるものは、潰瘍だけではない。昨年日本のヘリコバクター共同研究グループがイギリスの医学誌に発表した論文によれば、内視鏡治療を行った胃がん患者のうち、ピロリ菌を除菌した患者は、除菌していない患者に比べて、新たな胃がんの発生リスクが約3分の1に減っています。胃がんとの直接の因果関係はまだ証明されていないが、除菌した患者は、除菌していない患者もいますが、重症化する方には一度検査を受けて、陽性なら除菌したほうがいいですね。除菌治療により逆流性食道炎を起こす患者さんもいますが、重症化することはあります」（佐藤医師）

日本ヘリコバクター学会では、今年から認定医制度を開始した。近い将来、胃の悩みに応えてくれる医師を探す際の指標になるだろう。さらに同学会では、保険適用をより広い範囲に広げるべく議論を進めていく。しかし、除菌治療を無症状の感染者全員に行うべきだというのであれば、ピロリ菌が胃がん発症と関連があるという確実な根拠の提示や、最近、指摘されている抗菌剤に対する耐性菌出現による除菌失敗例の増加防止など、さらなる研究成果を求める。

これまで、胃潰瘍は「再発を繰り返す病気」だった。対症療法と薬剤と、胃酸の分泌を抑える「プロトンポンプ阻害薬」を1日2回、1週間飲み続けるだけである。この方法でおよそ9割の感染者は除菌可能だという。

それまで、胃潰瘍は「再発を繰り返す病気」だった。対症療法として、制酸剤や消化剤を飲み続けるしかなく、患者は大きな苦痛を強いられてきた。除菌治療の確立は、胃痛に悩む患者にとって希望の光となつたのだ。

「この治療が一般的になつてからは、潰瘍がすっかり消え、明るい